OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人称代名詞ILの指示対象 : おもにCEとの対比において
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	仏語仏文学研究. 1991, 7, p. 117-141
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57753
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

人称代名詞ILの指示対象

——主にCEとの対比において——

井元秀剛

はじめに

この小論は、人称代名詞ILの指示対象の特性をCEのそれとの対比によって明らかにすることを目的とする[1]。ILとCEの違いについては、特にその繋辞文IL est/C'estの対立をめぐって多くの考察がなされてきた。初等文法でよく説かれるように、属詞名詞が、無冠詞で用いられるか冠詞を伴うかによって、

(1) (a) Il est linguiste.
(b) C'est un linguiste.

と使い分けられ、*Il est un linguiste. *C'est linguiste. の形は存在しない[2]。また、(1)の(a)と(b)は談話的価値において等価ではなく、

(2) Qui est Chomsky ?
(a) *Il est linguiste.
(b) C'est un linguiste.

(3) Que fait Chomsky ?
(a) Il est linguiste.
(b) *C'est un linguiste.

のように、使用される文脈が異なっている。

さらに、属詞が形容詞の場合、先行詞が総称名詞であるか否かもILとCEの選択に係わっていて、

(4) (a) Mes cochons ils sont jolis.
(b) Les canards c'est jolis. (朝倉, 1981)

のような使い分けが見られる。この現象は繋辞文のみに限られるものではなく、一般動詞の主語の場合にも、また目的補語の場合にも観察される一般性をもったものである。

(5) (a) Mon chien, il aboie.
(b) Les chiens, ça aboie.

(6) (a) Aimez-vous cette musique ? — Oui, je l'aime beaucoup.
(b) Aimez-vous la musique ? — Oui, j'aime beaucoup ça. (Pourquier, in 朝倉,

1981)

C'est と Il est をめぐるこれまでの研究で主なものに、Burston et Burston (1981), Coppieters (1975), Tamba-Mecz (1983), 東郷 (1986), 三藤 (1989) 等があるが、このうち東郷 (1986) は、IL と CE の指示機能の差を問題にした点で興味深い。本稿は、東郷 (1986) の研究成果をふまえ、彼が名詞句の代用表現と性格づけた IL について、その名詞句の内部 (指示対象) に立ち入ってさらなる定式化をめざすものである。

この場合、先行詞と IL の指示対象が必ずしも同一であるとは限らないことに注意しなければならない。

(7)George Sand est sur l'étagère de gauche. Tu verras qu'elle écrit divinement. (Fauconnier, 1984)

この時、先行詞 George Sand が指示するのはこの作家が書いた本であるが、elle は作家自身を指している。このような現象の背後に潜む指示の機能を明確にしなければならない。

1.名詞句の二つの意味機能

特定の文脈に置かれた名詞句の担う意味作用には、二つの異なった側面がある。一つは辞書の定義が与えるような個々の名詞句が持つ属性であり、他の一つは言語が記述し、構築する世界の中で、名詞句が対応するその属性を備えた個物である。例えば、le président は、第一義的に「国家を統括する人」という属性を示し、特定の文脈 (現在のフランス) の中で用いられた時、Mitterrand という個物に第二義的に対応する。Frege 以来、多くの哲学者、言語学者がそれぞれ独自の名称を与えながらもこの二つの側面を区別してきた[3]。Frege の『意義』と『指示』、Milner (1982) の『潜在的指示対象』(référence virtuelle) と『顕在的指示対象』(référence actuelle)、Donnellan (1966) の『属性的用法』と『指示的用法』、Fauconnier (1984) の『役割』と『値』の区別はおおむねこの二つの側面の違いに対応する[4]。この二つの違いに応じて、確定記述が二つの全く異なった様式で使われることを初めて言語学的に詳しく論じたのは Donnellan (1966) である。フランス語の例で説明すると、

(8) Paul veut voir le directeur.

には、二つの異なった読みがある。第一の読み (属性的読み) では、ポールは誰が局長 (=directeur) であるかを知っている必要はない。ともかく今現在局長の地位にいる人に会いたいということを (8) は語っていることになる。それに対し第二の読み (指示的読み) では le directeur は特定の人物の名前の代わりに使われているに過ぎない。仮に今現在局長の地位にいるその人を Martin 氏とすると、(8) はポールがマルタン氏に会いたいということを語っている文であり、氏が局長であることをポールが知っている必要は必ずしもない。第一の読みにおける le directeur は特定の時間と場所を与えられた

時に特定の個人に対応する関数である、とみなすこともできる。こういった観点から Fauconnier (1984) は名詞句の属性的用法を『役割(関数)』と呼び、この関数が特定の文脈で与える個人(上例ではマルタン氏)を『値』と呼んだ。本稿では、この『役割』『値』という概念を主として用いる。

『役割』『値』の違いは確定記述のみに適応されるものではなく、不定名詞句の『特定』『不特定』をめぐるあいまいさにも適応され、(8) と同一の原理で (9) から二つの読みが出てくることも説明できる。

(9) Ursula veut épouser un millionnaire. (Fauconnier, 1984)

un millionnaire を『役割』として読めば、百万長者と言う範疇を提示するだけで、特定の個人の存在を含意しない、いわゆる『不特定』の読みが成立するが、『値』として読めばユルスラが目をかけている特定の百万長者が存在することになる。

さらに (8) とは感覚的に異なる (10) のあいまいさも、『役割』『値』の違いに帰着できる。

(10) Le président change tous les sept ans. (Fauconnier, 1984)

Le président を『役割』として読めば、この役割関数が7年ごとに『値』を変えるという最も自然な読みが得られるが、『値』として、つまり (10) をミッテラン氏個人にたいする記述と読むことも可能である。例えば氏は7年ごとに政策に対する態度を変えるというように。

ここで『役割』が他の『役割』の『値』になりうることを確認しておこう。

(11) — Quel est le chef de l'Etat en France ?
— C'est le président.
— Et alors, quel est le président ?
— C'est François Mitterrand.

Quel は『役割』に対応する『値』を尋ねる疑問詞だが[5]、このテストを使うと (11) における一連の対話で、Mitterrand を与える役割関数としての le président が le chef de l'Etat (en France) の『値』に使われていることがわかる。

2. 『役割』『値』の別と人称代名詞

『役割』『値』の概念を用いると人称代名詞の照応について次の仮説をたてることができる。

(仮説1) IL は先行詞の『値』を受け、『役割』のみを受ける時は別の代名詞を用いる。

この仮説を用いると (1) の違いが、明確に説明できる。次の二つの文を較べてみよう。

(12) (a) En ce temps-là, son mari, il était linguiste.
(b) En ce temps-là, son mari, c'était un linguiste.

(12a) は、il が son mari の『値』を受ける。この場合、問題の女性の夫を指していて、その夫の当時の職業は言語学者だったと言っており、彼がその後、職業を変えたことを含意する。それに対し、(12b) では、ce が son mari の『役割』を受け、彼女の当時の夫は言語学者であったということを意味する。ここで含意されるのは彼女が後、夫を変えたと言うことである。(2)(3)についても、同様の説明があてはまる。固有名詞の指示については哲学者の間で様々な議論がなされてきているが[6]、筆者は固有名詞 N の『役割』は、「N という名で呼ばれる人(あるいは物)」であり、特定の『値』を常に持つ恒等関数であると考えている[7]。従って通常は『値』指示にしか用いられないが、その『値』が不明である時、すなわち identité を問題にする時に限り、『役割』指示で用いられる[8]。(2) の質問文で使われた Chomsky は正にそういった『役割』指示の固有名詞であり、(2b)の ce はその『役割』をうけ、その『役割』に対応する『値』を指示しているのである。これに対し (3) の Chomsky はすでに確立した『値』を指示している。(3a)の il も、この『値』を受けているのである。

CE 以外に『役割』のみをうける代名詞に中性代名詞の le や、en がある。

(13) Nous sommes des meurtriers et nous avons choisi de l'être. (Camus, in 朝倉, 1981)

(13)のように属詞の位置にくる名詞句をうける le は、現在では性数の変化を受けないので中性代名詞として人称代名詞 IL とは別物と考えなければならない。中性代名詞は、形容詞に近い無冠詞名詞や形容詞をも受けうるので、『役割』をうけ、その属性のみを指示すると考えるべきであろう。

(14) Avez-vous des enfants ? — Oui, j'en ai deux.

(15) Ursula veut épouser un millionnaire, mais elle n'en trouvera pas. (Fauconnier, 1984)

(14)(15)のように『不特定』の名詞句をうけるのは en である。(14)の en は『役割』そのものを指示し、(15)の en は、『役割』を受け、その『役割』に対応する個人を指示する[9]。

ここで、後に詳述する総称名詞句についてもおおよその方針を示しておきたい。(4)(5)(6) のように総称か否かが CE と IL の使いわけに関係することもあるが、意味的関係で言えば、総称の読みと特定の読みは『役割』と『値』の違いに対応するとも言える。特に un N 総称文の場合、un N を『役割』として読んだものが、特定の条件のもとで総称名詞句になるものであり、この観点から (16) を見てみると、

(16) Un chien, ça aboie, mais mon chien, il n'aboie pas.

この un chien は『役割』指示であるがゆえに総称名詞句としての解釈をうけ、その『役割』(当然のことながら『値』を持たない) を ça が受け、特定の『値』を持つ mon chien の、まさにその『値』を il が受けているのだと考えることができる。

このように、IL は先行詞の『値』を指示するのであり、先行詞が『値』を持たない時は IL で受けられないと考えるのが自然である。三藤 (1989) も c'est と il est をめぐ

る使いわけで、指示対象が『非固体』(『役割』に相当する)のときは c'est を用いる、と述べているし、Furukawa (1990) では、狭義の指示対象(『値』に相当する)を名詞句が持つか否かのテストに IL による受け直しの可否を用いている。

ところが、Milner (1982) は全く逆の見方をしている。彼によれば、IL の持つ機能は先行詞の『潜在的指示対象』(『役割』に相当する)を受け継ぐことのみであり、現象的に『顕在的指示対象』(『値』に相当する)を指示しているように見えるのは、そうして受け継いだ『潜在的指示対象』が個々の文脈で『顕在的指示対象』を持つからにすぎない、と言う。そう考える根拠として、『潜在的指示対象』は先行詞と共通でありながら、『顕在的指示対象』が先行詞と異なる IL があるとして、次のような例をあげる。

(17) (a) certains éléphants vivent 90 ans, mais, en général, ils vivent moins longtemps.
(b) on a collé plus d'étudiants qu'ils ne l'espéraient.
(c) on a rasé la chevelure de Samson, mais elle a repoussé . (Milner, 1982)

さらに、総称名詞は名詞句を用いた忠実照応を許さないから『顕在的指示対象』を持たない。それでも IL でうけることが可能であるのは IL が『潜在的指示対象』を受け継ぐからであるとして (18) の (a)(b) を比較させる。

(18) (a) *un chaval est un mammifère...le chaval se laisse domestique.
(b) un chaval est un mammifère, et il se laisse domestique.

(18) の現象は (4)(5)(6) や (16) と逆の結果を示している。このように総称名詞の受け直しは単純に処理できない複雑さをはらんでおり、総称名詞そのものの指示対象をどう考えるかも含めて、改めて検討してみる必要がある。が、ここではとりあえず、Milner の IL が『潜在的指示対象』を受け継ぐと言う仮説に対しても容易に反例が見つかることを指摘しておこう。

(19) Mon docteur vient d'agrandir son cabinet de réception. Elle avait trop de clients. (Kleiber, 1990)

この例では mon docteur と elle が共通指示の関係にあるが、docteur は男性名詞であるから『潜在的指示対象』を受け継ぐ代名詞は il でなければならないのである。(19) は elle が先行詞の『値』を受けた典型的な例であろう。このように見てくると、(仮説 1) は基本的には正しいと思われる。

だがその場合でも Milner があげた (17)(18) の例が説明されなければならないし、またそれ以外にも『役割』指示でありながら IL を用いていると思われる次のような例を説明しなければならない。

(20) Le président, il change tous les sept ans.
(21) Ursula veut épouser un millionnaire, elle a entendu parler de ce type, mais il n'existe pas. (Fauconnier, 1984)
(22) Jean veut attraper un poisson pour le manger pour son dîner. (Furukawa 1988)

(23) A la Cour suprême, un juge a moins de vingt ans.

(a) En 1936, (il/ce juge) était de Californie.

(b) En ce moment, il est de Brooklyn.

(c) Il est généralement irlandais. (Fauconnier, 1984)

(仮説1)をこれらの現象にも適応できるよう修正、または補足する必要がある。

3．発話にともなう場・スペース

前章で見たように、IL による受け直しを先行詞の『値』または『役割』の単純な繰り返しととらえていたのでは IL の本質はつかめない。そもそも名詞句の指示対象を問題にする場合、発話文がどのような状況で、どのような世界を問題にして語っているか、ということを考えなければならない。井元 (1989) で筆者は『発話状況』(circonstances d'énonciation),『発話内世界』(monde énoncé) を設定した。『発話状況』は、話し手と聞き手が発話行為を行っている場であり、ici と maintenant という二つの副詞で指示される。これに対し、『発話内世界』は発話が語る場面であり、発話内容が有効性を持つ場と定義される。Un avion s'est écrasé hier. という発話について言えば、「飛行機が破壊した」という事件は hier という副詞が限定する特定の時間、さらに特定の場所のなかにおいてのみ有効であり、それが『発話内世界』である。個々の発話文は必ず『発話内世界』をもつが、それがどこに位置づけられるかは解釈の問題で、①『発話状況』のなかで占める位置(いわゆる文脈)②発話文の意味内容、③発話文の時制、及び副詞句の三つの影響をうける。名詞句の解釈も②を構成する要素であり、名詞句は自らの指示機能により、『発話内世界』の構築に貢献する一方、そうして構築される『発話内世界』によって、指示が限定され、指示対象が特定されるという二重性を持つ。『発話状況』は、そこで語られる全ての発話の外側にあって、その『発話内世界』を見通し、それらを統合する位置にある、と言うことができる。例えば、Un avion s'est écrasé hier. Cet avion relie habituellement Miami à New York. (Kleiber, 1986) の二文は、別々の『発話内世界』をもつが、一連の発話を構成している。これは『発話状況』から指示を行う Cet avion によって前文の『発話内世界』の内部にある un avion を受け、それを後続文の『発話内世界』の中に置き、いわば『発話状況』の立場から、二つの『発話内世界』を結んでいるからなのである。

Fauconnier (1984) のメンタル・スペースはこの『発話内世界』をさらに厳密化した概念であると言うことができる。それは、個々の要素(潜在的に名詞句の指示対象たりうるもの)がそこで記述される特性(『役割』記述にあたる)を保持している場、もしくは要素間に設定される関係が成立する場、と定義することができよう[10]。この定義の後半部は筆者の『発話内世界』の定義とも重なるが、『発話内世界』が個々の発話文をめぐって、発話文ごとにただひとつだけ設定される、聞き手の発話文の解釈による産物

であるのに対して、メンタル・スペースは言語過程と心理的構成物の厳密なモデルを構築するため、話し手や聞き手の自覚とは別個に設定された理論的産物である点が異なる。Fauconnier はメンタル・スペースについて次のように記述する。「メンタル・スペースとは、言語構造とは別の構成物であるが、言語表現が提供する指針に基づいて設定されるものである。このモデルで、メンタル・スペースは構造をもった増加可能集合(incrementable set) として表される。すなわち、要素 (a,b,c,...) と要素間に成り立つ関係 (R_{1ab},R_{2a}, R_{3cbf}...) を持つ集合であり、新しい要素を付け加え、要素間に新しい関係を設定することができる。」[11] このような形でメンタル・スペース(以下単にスペースと略記)が規定されると、これまで漠然と用いてきた『役割』『値』の概念にも厳密な定義を与えることができる。本稿では『役割』を「それが置かれるスペースによってパラメーターが固定され、その記述を満たす量的に限定された言語世界対応物を与え得る関数」、『値』を「『役割』記述を満たす量的に限定された言語世界対応物」と定義し、その意味で用いることにする。ここで「量的に限定された」とは「同一の記述を満たす他の要素と区別し得る」という意味であり、フランス語では限定詞(冠詞、所有形容詞など)の使用によってそれが示される。

さて、スペースの具体例を見てみよう。

(24) En 1960, le président adoptait un enfant malheureux.

これは「現代の世界」を親スペースとし、その中に「1960年の世界」が子スペースとして組み込まれたものである。En 1960 はスペース導入表現として働いている。煩雑さを避けるため、『値』解釈のみを扱うと、(24)は le président の解釈に応じて、現代の大統領(=Mitterrand) の 1960年の行動を記述したもの(解釈 1)とも、1960年当時に大統領であった人物(=de Gaulle)の当時の行動を記述したもの(解釈 2)とも取ることができる。(解釈 1)において le président に指示対象であるミッテランがここで記述されている le président という特性を保持している場は「現代の世界」という親スペースの中だけである。これに対し、ミッテランとその「不幸な子供」という二つの要素の間に設定される養子縁組みという関係が成立する場、またその子供が un enfant malheureux という特性を保持している場は、「1960年の世界」という子スペースである。この解釈では親スペースと子スペースの間に包含関係が成立する。これに対し、(解釈 2)では、すべての要素とその関係の記述が子スペースの内部に成立しており、親スペースとの間に包含関係はない。我々の『発話状況』と『発話内世界』という視点を用いて、この二つの解釈の上に敷衍すると、(解釈 1)では、『発話状況』に重なるものとして親スペースが想定され、その内部に設定される子スペースを親スペースのフィルターを通じて眺めた世界が『発話内世界』ということになる。つまり、『発話内世界』は「1960年の世界」の中に、親スペースである「現代の世界」が浸透したものとしてあるのである。これに対し(解釈 2)は「1960年の世界」がそれ自体で『発話内世界』を構築し、親スペースは『発話状況』の中に解消されてしまう。スペース導入詞には、en 1960 といったよ

うな前置詞句等の他 Marie croit といったような主語と動詞の結合もあり、「話者の現実」という親スペースのなかに「マリーの観念の世界」という子スペースを導入する。

4. 代名詞の名詞句としての価値

4.1 『十全な名詞句』と『不完全な名詞句』

名詞句が『役割』や『値』をどのように備えているかに従って、『十全な名詞句』『不完全な名詞句』という概念を導入したい。

『十全な名詞句』(syntagme nominal complet) とは「特定のスペースの中に置かれた時、性・数の分類化が可能な特性を持ち、その特性が、話者と聞き手の間に共通の了解が成立する『値』を自動的に与えることになる名詞句」を言う。性・数の分類化可能な特性とは概ねこれまで述べてきた『役割』に相当するが、「人」を表す場合、『役割』を欠いていても、性・数の識別ができれば、人間であること自体によってこの特性を備えていると言うことができる。この『十全な名詞句』に対し「当該のスペース内で『役割』を持ちながら、その『役割』が『値』を自動的に与えることのできない名詞句、あるいは『値』のみであるか、『役割』を備えてはいても、その『役割』が性・数の分類化不可能な特性である名詞句」を『不完全な名詞句』(syntagme nominal incomplet) と呼ぶことにする。

この規定のもとで、(8) の例に戻って再び名詞句の『役割』指示と『値』指示の二つの読みについて検討してみよう。

(8) Paul veut voir le directeur.

(8) は親スペースとして「話者の現実」R が、子スペースとして「ポールの観念の世界」M が存在する。まず『役割』の読みについて、この場合、ポールが局長本人を知っている必要はない。しかし、その存在は確信していよう。つまり、知っているか否かにかかわらず、(8) は「ポールが directeur に相当する人物 (=『値』) に会いたがっている」ことを語っているのであり、M の内部においては『値』の存在は保証、または前提とされている (たとえ R 内にその対応物が存在しない場合でも)。この場合話者は、le directeur の『値』について「ポールの観念の世界に必然的に存在する局長の地位にいる人物」という了解を、聞き手との間に結ぶことを承認している。要するに M の内部では le directeur は『十全な名詞句』として機能しているのである。

次に『値』の読みについて考える。たとえその『値』が M 内で directeur という特性を持っていない場合でも、(8) によって R における『値』の『役割』が表現される。つまり R の内部では le directeur は『十全な名詞句』としてある。結局 (8) の le directeur はどの読みの場合でも、その『発話内世界』内部の一スペースの中では『十全な名詞句』として働いているのである。こうして考えてみると、大概の名詞句は『十全な名詞句』であり、『役割』『値』の読みと言っても、それはどちらの側面に光をあてるか、

またいかなるスペース内の要素としてとりあげるか、という見方の差にすぎず、通常は『役割』も『値』も備えたものとしてある。そして特に文脈が指定しない限り、あるスペース内で与えられた要素の特性は他のスペースでも維持されるように読むのが自然であるから、『役割』と『値』の読みの差が意識に登ることはまれである。実際、局長がマルタン氏であることをポールが知っている場合、つまり局長であるマルタン氏にポールが会いたいと思っている場合、その読みは『役割』の読みとも『値』の読みとも決定しがたい。

4.2. IL の指示対象

『十全な名詞句』を以上のように規定するとき、IL の指示について(仮説1)を次のように修正できる。

(仮説2) IL は、当該の『発話内世界』に含まれるスペースの中に『十全な名詞句』として存在している要素を指示する。その先行詞は『発話状況』に現存(いかなるスペースの中にあってもよい)する『十全な名詞句』であり、IL と先行詞は、先行詞を『十全な名詞句』たらしめた性・数の分類可能な特性を共有する。

上で検討した (8) は代名詞を使って書き換えるといずれの読みの場合も Paul veut le voir. となるが、この le は『発話内世界』内部の観点に立って、そこに含まれるスペースの中の『十全な名詞句』としてある要素を指示している。その要素は『役割』の読みでは、子スペースである「ポールの観念の世界」の中に、『値』の読みでは、親スペースである「話者の現実」の中にあるが、いずれの場合も、そのスペースの中では le directeur という『役割』(=先行詞を『十全な名詞句』たらしめた性・数の分類可能な特性) を持っていることを確認してほしい。

先行詞の『発話状況』における現存、ということについて説明を加える。ここで「現存」というのは、単に存在しているのではなく「認知可能なものとして存在している」ということである。Il neige. という発話がなされたとすると、その『発話内世界』の中に「雪」が存在していることは明らかであるが、その発話を発し、また聞いている『発話状況』の立場から見ると、その「雪」はいまだ la neige という名詞句として概念化されてはおらず、認知可能なものとしては存在していない。従って *Il neige et elle tient. (Kleiber, 1990) とは言えない。これに対し、実際に雪が降っている現場で「雪」を示して、Elle tient ! (ibid.) と叫ぶことは可能である。この『発話状況』の中では現実の「雪」が存在し、話者がそれを知覚し、観念の中で la neige という『役割』をかぶせて、現実の「雪」に対応する la neige の指示対象が認知可能なものとして存在しているからである。ここで la neige の指示対象と言っても、それが現実の「雪」そのものではないことを改めて確認しておこう。言語が構築する世界はあくまで現実の写しであって、現実そのものではない。従って名詞句の指示対象も、言語が表現する言語世界の産物であって、現実に存在しているモノそのものではないのである。La neige tombe. と言った

時、la neige の指示対象は『発話状況』に現存している。だが、そのこととこの発話を発している現場で現実の「雪」が降っていることとの間に直接の関係はない。まただからこそ、われわれは空想の物語を語れるのであり、現実に「雪」がなくとも、La neige tombe et elle tient. と『十全な名詞句』elle によって la neige は受け直せるのである。『発話状況』に現存するための言語的条件は「名詞句として言及をうけること」である。

先行詞の条件が『発話状況』の現存で、それが置かれたスペースと無関係であることを(7) の例を使って見てみよう。

(7) George Sand est sur l'étagère de gauche. Tu verras qu'elle écrit divinement. (Fauconnier, 1984)

まず、先行詞の指示の特殊性を考慮に入れなければならない。ここでは (a)「(作家) ジョルジュ・サンド」と (b)「ジョルジュ・サンドの書いた本」という潜在的に指示対象たりえる二つの要素が介在している[12]。直接言及を受けた (a)は言及を受けたことで『発話状況』内に現存するが、発話が構築する『発話内世界』の中には存在せず、(a) と語用論的関数で結ばれた (b)が (a)の記述によって指示されることになる[13]。elle の先行詞はこの『発話状況』内に現存する (a)であり、これは最初の文ではいかなるスペースにも置かれていない。また George Sand は固有名であり、「ジョルジュ・サンドという名で呼ばれる人」という『役割』を持ち「ジョルジュ・サンドその人」という『値』をいかなるスペースにおいても与えるから、これは『十全な名詞句』である[14]。

先行詞と IL がスペースを共有する必要はなく、『役割』のみを共有すればよいのであるから、それらが別々の『値』をとることもありうる。名詞句の『役割』とはスペースを領域とする関数であって、異なったスペースに存在する名詞句はたとえ『役割』が同一であっても、異なった『値』を与えうるからである。この現象は三藤 (1989) において今後の研究課題として残された問題となっているので、ここで改めて彼が問題にした次の Fauconnier (1984) の例を検討してみよう。

(25) La gagnante est blonde, mais Georges croit qu'elle est rousse.

話を簡単にするため、la gagnante の読みを『値』に限定しよう。その『値』をローズとする。すなわち、話者は金髪であるローズが勝ったと信じている。elle は『役割』と『値』の両方の読みが可能である[15]。『役割』の読みとは、例えばジョージが赤毛のオリーブが勝者であると信じているような場合である。『値』の読みは、ジョージがローズを赤毛であると信じていると言うことになる。(25)は「話者の現実」という親スペースの中に「ジョージの信念の世界」という子スペースが導入され、子スペースに親スペースが浸透可能なものとして『発話内世界』を了解できる。『役割』の読みの時の elle は子スペースの中の要素を指示するが、それは la gagnante という『役割』を持ってオリーブという『値』を与える『十全な名詞句』である。(この elle が決して『非固体』である『役割』のみを指示しているのではないことを忘れてはならない。)この時、先行詞の la gagnante は親スペースの要素で、『値』はローズであるから、共通の『役割』

をもってはいても『値』は異なっている。『値』の読みの時の elle は親スペースの要素を指しているが、それを子スペースの中で働かせている。この elle は親スペースの要素であるから、『役割』も『値』も先行詞と同一の『十全な名詞句』であることは言うまでもない。

それでは、先行詞と IL が異なった『役割』を持っているように見えた(19)の例はどのように説明されるのだろうか。

(19) Mon docteur vient d'agrandir son cabinet de réception. Elle avait trop de clients. (Kleiber, 1990)

これは mon docteur が潜在的に、「人間の女性」という別な資格をもって『十全な名詞句』足りえている、と理解すべきであろう。話者が mon docteur と言ってこの対象を『発話状況』に現存させた時、その意識の中には「人間の女性」としての医者が認知可能なものとしてあったと思われる。elle はこのような形で『十全な名詞句』たりえているこの対象と、それを『十全な名詞句』たらしめた「人間の女性」という特性を共有しているのである。対象のこの理解の仕方は話者にとって自明であるから、聞き手もその対象を同様に理解しているものとして、(19)が発せられたものであろう。実際、聞き手も話者のかかりつけの医者が女性であることを知っている場合、(19)の理解に何の抵抗もないが、それを知らなければ、これはいささか奇異な発言と感じられるだろう。同様の例をもう一つあげておこう。

(7)' George Sand est sur l'étagère de gauche. Il est relié en cuir. (Fauconnier, 1984)

ここでも(7)と同様(a)「(作家)ジョルジュ・サンド」と(b)「ジョルジュ・サンドの書いた本」の二つの要素が介在している。実際に言及を受けたのは(a)であるが(b)を間接的に言及しており、話者の意識の中には、(b)が le livre という言語的『役割』をかぶせられて『十全な名詞句』の資格で現存しているのである[16]。il はこのように存在している先行詞(b)と le livre という『役割』を共有しているのであろう。

4.3. CE の指示対象

『十全な名詞句』として働く IL に対比して、CE の特徴を述べれば『不完全な名詞句』として働く、ということになる。これは名詞句としてある、CE そのものの性質である。その指示対象が『十全な名詞句』として表現されえないのだから、それを言語的に提供する先行詞といっても、そのきっかけになるだけであって、IL と同じ意味で先行詞と呼ぶことはできないし、名詞句である必要もない。IL は『言語的コントロール』を受け、言語的先行詞の支配をうけるから、(仮説2)のように、その先行詞たる条件を言語的に規定することも可能であろう。だが CE は『語用論的コントロール』を受ける、極めて現場に密着した代名詞であって、その指示対象を提供する仕組みをラングに内在する性質として規定することは不可能であると思われる[17]。従って、以下は、名詞句としての CE が、どのような形で『不完全な名詞句』となっているかを観察する。次の

三つの場合がある。

①『役割』が当該のスペースで自動的に『値』を与えることを話者が拒否する場合

(2)(b) Qui est Chomsky ? C'est un linguiste.

(12)(b) En ce temps-là, son mari, c'était un linguiste.

(2b)の質問は、この話者にとってChomsky がどのような『値』を与えるかを知らず、この『役割』は当該のスペース(=『発話状況』)内では自動的に『値』を与えないことを示している。答えの文でceはこの『役割』概念のみを受け、「この『役割』概念の語用論的対応物」という形で間接的に『値』を指示し、その『値』に対してun linguisteという『役割』を属詞で与えているのである。(12b)の属詞に用いられたun linguisteは(2b)のそれと異なり『役割』のみでなく『値』も備えているように思われるが、ceの用法そのものは(2b)と同じである。つまり話者はen ce temps-làで導入されるこのスペース内でson mariが自動的に『値』を与えることを拒否しているのである。別な言い方で言えば、son mariがこのスペースで自動的に与える『値』という了解では、話者がson mariによってこのスペースで指示したい対象を指示できない、と話者が見なしているということである。ceの使用によってson mariの『役割』概念のみを受け、「この『役割』概念の対応物」という形で間接的に『値』を指示することで、その『役割』が自動的に『値』を与えることを拒否できる。(12b)の文はこうして間接的に指示された『値』と同値なものとしてun linguisteという記述で与えられる要素を導入し、son mariのこのスペースにおける『値』を新たに設定する文となっている。これをson mariをilで受けた(12a)の場合と比較してみよう。(12a)は話者がson mari = ilを『十全な名詞句』として機能させているのであるが、これは、son mariという『役割』がこのスペースの中で自動的に持つ『値』という了解で、son mariの指示対象に関して話者と聞き手の間に共通の理解が成立すると話者がみなしている、ということである。

『役割』が当該のスペースの中で『値』を持たない場合もこの①に含めて考えてよい。

(26) Ça coûte combien une auto comme ça ? (Duras, in 朝倉, 1981)

この場合、çaが受けるのは後方にあるune auto comme çaで、指示対象である「une auto comme çaの対応物」は、『発話内世界』の中には存在していない。従って、この『発話内世界』(=『発話状況』)ではelleで受けることができない[18]。comme çaのçaについては後述する。

②『役割』が性・数の分類不可能な特性である場合

(27) (a) Marx, c'est fini.

(b) Marx, il est fini. (三藤, 1989)

(27b)のilがMarxその人を指示するのに対し、(27a)のceはMarxと、いわゆる『語用論的関数』で結ばれた「マルクス経済学あるいはマルクスに関する議論」といったようなものを指す。この「マルクス経済学あるいはマルクスに関する議論」は、当然のことながら性・数の分類化が不可能なものであり、その指示はceによって、「先行概

念 Marx の語用論的対応物」という形で間接的に行われなければならないのである。

また先行概念が名詞句以外で提示される場合、その概念は性・数の分類化が不可能であるから CE によって対応物の形で示されることは言うまでもない。

(28) Il aura affaire à des militaires. Cela ne lui fera pas peur ? (Roussin, in 朝倉, 1981)

③『値』のみが指示対象になる場合

典型的な例は眼前のものを受ける直示指示の用法で、(26) にある comme ça の ça がこれにあたる。この ça は眼前にある「車」そのものを指す。この「車」は単なる『値』でしかなく、言語的に l'auto という形で『役割』を備えた先行詞として提示されてはいない。une auto の指示対象はこの眼前にある「車」ではない。こういった用法では、目の前にあるこれから指示しようとする物の名前を知っている必要はなく、口語で頻繁に用いられる。例えば、八百屋などで野菜の名前を知らない場合、「あれとあれを下さい」と言うのに、ça et ça と指差しながら指示することができるだろう。この場合など、文字どうり ça が眼前の対象と語用論的に結びつけられるのである[19]。

先行詞が『十全な名詞句』として提示されながら、新たな『役割』を付与するという表現意図による方略から、ce によって『値』のみを受けることがある。

(29) Orphée— Je les aide. Comment se comporte le garçon ?
Eurydice— Orphée, c'est peut-être une fille... (Jean Cocteau, *Orphée.*)

ここで Eurydice は le garçon の『値』のみを ce でうけることで、その『役割』を引き継ぐことを拒否している。また Tiens, prends ce stylo. Ce sera le tien. (Burston et Burston, 1981) のように所有が問題になる構文でも機械的に CE が出てくる。

(30) Anne d'Orgel voulut faire visiter à François, qui la connaissait, l'écurie du cirque, comme si c'eût été la sienne. (Radiguet, *Le Bal du comte d'Orgel.*)

ここで ce の先行詞 l'écurie du cirque は、すでに la で受けられていることからもわかるように、『十全な名詞句』であるが、それを la sienne(=son écurie) という『役割』の値として働かせるため、あえて分類化を拒絶し、l'écurie du cirque の『値』だけを ce が受け継いだのであろう。

4.4 『役割』指示とみなされる IL の検討

ここで IL にもどって(仮説1)の反例としてあげられた例について検討し、それらが皆(仮説2)を満たすことを確認する。

(20) Le président, il change tous les sept ans.

le président は、Mitterrand に対しては『役割』の関係にあるが、(11)の例でもわかるように le chef de l'Etat (en France) に対しては『値』の関係にある。『役割』としての le président は「場所」「時間」という二つのパラメーターを持つ関数である。Mitterrand はスペースによって、この二つのパラメーターがそれぞれ「フランス」「現代」に固定された時の『値』である。しかし、「時間」のパラメーターが変数のまま残されていても、

スペースから「場所」のパラメーターが固定された、le président の言語世界対応物 (=le président de la République) も我々の定義に従って『値』と呼ばれなければならない。現に、(11)で『値』として働いている le président も、「時間」パラメーターは変数のまま残され、限定を受けていない。(20) の『役割』le président の『値』はまさにこの le président de la République なのである。確かに今の場合、『役割』に対する『値』が別の名詞句によって置き換え可能なものではないが、次の例によっても le président de la République が le président の『値』たりえることが感覚的に理解されうると思われる。

(31) En France le président change tous les sept ans, mais aux Etats-Unis, il change tous les quatre ans.

ここで le président de la République が『値』になっているのは先行詞の le président に対してだけであり、同じ『役割』を持つ『十全な名詞句』il の『値』は「アメリカの大統領」という別の『値』をもっている。こうしてみると (20) の le président も『値』を備えた『十全な名詞句』であり、その『役割』と『値』双方をうけついだ (20) の il もその先行詞と全く等価な『十全な名詞句』として働いているのである。

次に (21) の例に移る。(21) と (15) を較べてみよう。

(21) Ursula veut épouser un millionnaire, elle a entendu parler de ce type, mais il n'existe pas.

(15) Ursula veut épouser un millionnaire, mais elle n'en trouvera pas.

(21)(15) ともに『発話内世界』は「話者の現実」という親スペースの中に「ユルスラの観念の世界」という子スペースが浸透したものとしてある。(21) の il n'existe pas. は、この子スペースの中のユルスラが存在を信じている ce type を il が指示し、それが親スペースで存在しない、という言及である。つまりこの子スペースの中では il が指示する ce type は『十全な名詞句』として存在しているのである。これに対し (15) の elle n'en trouvera pas. の関与するスペースは動詞 trouver の規制を受ける。この『発話内世界』の内部にあって trouver という行為の対象になるのは、存在することが保証されていない millionnaire という範疇に属する人物であって、この『発話内世界』の内部では、いかなるスペースを問題にしても、un millionnaire を不特定な名詞句と解釈する限り、『十全な名詞句』としてはありえない。

(22) の例に移ろう。

(22) Jean veut attraper un poisson pour le manger pour son dîner.

ここで pour 以下の記述が適応されるのは poisson を捕まえたことが前提となる仮定世界である。つまりこの文は「話者の現実」の中に「ポールが希望を発する現在の世界」が導入され、さらに pour 以下で「魚を捕まえた後に成立するポールの観念の世界」というようなスペースが導入されたものとして『発話内世界』が構築されている。この最後に導入されたスペースの中では un poisson も『値』を持ち、le はそのスペースの中の『十全な名詞句』として機能するのである。ここで先行詞の un poisson は、それが置

かれたスペースの中では『値』を持たないが、『発話状況』の観点から見れば、『値』を持つ別なスペースを想定することが可能であるので、『十全な名詞句』と言ってよいと思われる。

不特定語を前件にもち後件でそれを IL で受ける条件文は、すべてこれと同様の原理による。

(32) Si quelqu'un avait vu le voleur, il aurait averti la police. (Kleiber, 1990)

ここで quelqu'un は『発話状況』に重なる親スペースとしての「現実世界」の中では、特定の『値』をもたないが、子スペースである「条件世界」の中では、いわばプロトタイプのような形で想定され、それが il で指示されている。このように IL が当該の『発話内世界』の中のいかなるスペースにある要素を問題にしているかを考えることによって、一見『役割』のみを指示しているように見える例も、その『発話内世界』の中に構築される一スペースの中にあっては自動的に『値』を持つ『十全な名詞句』として機能していることがわかるだろう。

(23) も同様である。

(23) A la Cour suprême, un juge a moins de vingt ans.

(a) En 1936, (il/ce juge) était de Californie.

(b) En ce moment, il est de Brooklyn.

(c) Il est généralement irlandais.

これらの文は皆その『発話内世界』を異にしている。先行詞 un juge も、スペースによって「場所」のパラメーターが固定され、一定の『値』を与える『十全な名詞句』なのだが、(a)(b)の立場からみれば、その『値』も「時間」パラメーターを変数として残す『役割』にすぎない。(a)(b)の il が指すのは特定の個人で、文字どうり『役割』と『値』を備えた『十全な名詞句』であるから、IL の指示対象としての資格は備えている。(a)と (b)では入力する「時間」パラメーターの値が異なっているために、『役割』が別の『値』を与えることになっているが、この現象もすでに (25)(31)によって確認している。問題は、『値』として (a)(b)の『役割』相当のものを与える先行詞の『役割』が (a)(b)の il がになう『役割』と同一のものとみなせるかどうか、ということである。ここで (c)の場合を考えてみよう。généralement によって示されるスペースは「時間」パラメーターを固定しはしないが、幅をもたせた形で入力している、と言うことはできるだろう。とすれば、全く「時間」パラメーターを入力しない先行詞の置かれたスペースも、その幅を最大限に広げた仕方で入力しているとみなすことができるわけで、このような見方をすれば (23)の un juge と il はすべて同一の『役割』を共有していると考えてよく、(仮説 2)の枠内でこれも処理できることになる。(23)の場合、先行詞の置かれた第一文と (a)(b)(c) の『発話内世界』が異なっているのであるから、(a)(b)(c) の il は先行詞そのものではなく、当該の『発話内世界』における先行詞の対応物でしかありえない。これは複数のスペースに跨がる対応物の変質という現象で、(25)(31)で確認したものと

同じである。

次に(17c)を考える。これも複数のスペースに跨がる対応物の変質という考え方で処理することが可能である。だが、そのような立場に立つ時、単なるmaisという逆説の接続詞までスペース導入詞として取り上げなくてはならなくなる。未来時制や目的を表すpourの句を導入詞に加えることには一般性があるとしても、maisのような接続詞までそれに加えることは、スペースの概念を不必要に拡張することにつながり、理論の自立性を脅かすことになりかねない。ここは名詞句のもつ多義性の問題として処理したほうがよいと思われる[20]。ここで使われているla chevelureは「物質としての頭髪」ではなく「人体の一部としての頭髪」であり、顔の皮膚が細胞レベルでは完全な入れ換えを経てなお同一の顔としてあるように、「サムソンの頭上にはえている髪の毛の全体」は、それを構成する毛の入れ換えがあってもなお同一の頭髪でありえるのである。従って、(17c)のelleは先行詞と『役割』も『値』も同一のものを指す、最も基本的な代名詞の用法ということになる。

同一要素の異なるスペース間の特殊な対応として処理すべきは、むしろ(17a)(17b)の場合であろう。これは『全体指示的用法』とでも名付けるべき複数人称代名詞全体にみられる一般的な現象で、「部分」の背後に「全体」を見るという、人間の認識の有り方に対応するかなり一般性を持った言語現象であろうと思われる。例えば、『発話状況』の内部に発話者と共発話者しか存在しない場面を考えよう。この場合でも発話者は、自分の所属する団体(グループ、会社、国)の成員の全体を指して「私共」と言いうるし、「あなた方」と言って共発話者の所属する団体の成員の全体を指示することができる。これはかなり多くの言語に共通した現象であろうと思われる。三人称の場合も同様であり、典型的な例は単数名詞句で提示された要素に対してその所属する団体の成員全体を指示する用法に見出せる。フランス語の例をあげると、一羽の七面鳥を目の前にして、農夫が訪問客に注意を喚起するために

(33) Attention! Ils sont dangereux. (Kleiber, 1990)

と叫ぶ事ができる。このilsは眼前の鳥もその成員である「七面鳥全体(総称)」を指す。完全に言語化された照応の例をKleiber (1990) からあげると

(34) J'ai acheté une Toyota, parce qu'elles sont robustes et bon marché.

(35) J'ai voulu cherché Pierre. Tu sais, ils n'habitent plus à X.

(34)のellesは「トヨタの製品全体」を(35)のilsは「ピエールの家族全体」を指示する。こういった用法の場合、un Nの背後に潜在的にあって、『発話状況』の立場から認知可能な「その成員が所属するクラス全体」を指示するles Nが先行詞となっている、と分析するのがよいと思われる。この時、先行詞とilsの間で共有される『役割』はles Nであって、実際の『役割』が言表に現れない(7)(7)'(19)と同様なものとして処理したい。(17a)(17b)もこういった用法に還元すべきものである。だがこの場合もILが(仮説2)を満たしていることは言うまでもない。

以上 IL で指示された全ての要素が(仮説2)を満たすことが確認されたと思う。ここで、(17a)(33)(34) の例で注目すべきことをあげておきたい。それは、これらはみな総称スペースの中で働いているが、(17a) 以外はスペース導入詞が使われておらず、複数代名詞の使用そのものが総称スペース解釈に貢献しているということである。一般に総称文の解釈はそこで使用される動詞と名詞句の性質に依存する以上、これは当然のことと言わなければならない。また先行詞と代名詞の置かれたスペースのずれが、その指示対象の変質をもたらすことがある (ex.(23)(25)) のであるから、先行詞と代名詞の間の指示対象の変質が、それらが置かれたスペースのずれを生み出し保証することになってもおかしくはないのである。

5. LE N / CE N と IL /CE

ここで、照応表現といった観点から、これまで考察してきた IL と CE の性格をもう一度見直してみよう。照応表現には代名詞によるものの他に、定冠詞を伴った名詞句 LE N と指示形容詞を伴った名詞句の CE N がある。井元 (1989) で筆者は、忠実照応に限定して LE N と CE N の指示機能の違いを論じたが、その違いを大まかに言うと、前者は『発話内世界』の内部で働くのに対し、後者は『発話状況』の立場から『発話内世界』をつらぬくかたちで働く、と言うことになる。これは、一般に anaphorique(文脈指示的)/ déictique (現場指示的) と表現される対立関係を筆者の言葉で言い変えたものである[21]。これと同様の関係が、代名詞 IL と CE の間に基本的に成立するであろうことは、直観的にも、語形態の上からも予測しうるであろう。だが、自ら『役割』たりうる特性を担う名詞句と、それ自体では何の特性も持たない代名詞ではその指示対象の性格はおのづから異なったものとならざるを得ない。LE N と IL そして CE N と CE、これら照応表現の共通点と相違点はどのような形で見出しうるのであろうか。

LE N と IL の共通点は、結果として表現された内容から観察すると、どちらもその記述を『発話内世界』の観点にたって行っている、ということであろう。IL は先行詞に関して『発話状況』の現存という条件を課すが、IL そのものの指示対象は『発話内世界』に含まれるスペースの中に存在し、しかもそのスペースの中で保持している特性 (=『役割』) に従って、それを指示対象としてとりあげている。例えば (25)の『役割』の読みを考えてみよう。この時とりあげられる子スペースの要素が la gagnante という特性を保持しているのは、この子スペースの内部に限られるが、elle は正にその子スペースの観点から見た特性によって、対象を特定しているのである。

LE N と IL の違いは、その先行詞の置かれる場にある。先行詞は LE N の場合、LE N が置かれるのと同じ『発話内世界』の中になくてはならないが、IL の場合、言及を受けて『発話状況』に現存していればよい。これは、それぞれが先行詞とになう関係の違いによる。LE N の場合、それ自体が名詞句として独立しており、自らの記述によ

って対象を特定するため、その先行詞は、そうやって特定されるべき『発話内世界』の要素をあらかじめ記述したもの、としてある。これに対しILは、名詞句として独立しておらず、自ら記述することはないので、対象の特定の仕方まで含めた、記述全体を提供してくれるものとして先行詞を必要とするのである。つまり、LENにあっては、その記述内容によって先行詞との関係が構成されるが、ILの場合は、記述内容が問題になる以前の、記述の仕方の問題で先行詞と関係を持つのである。そのためLENでは記述内容が構成する『発話内世界』が、先行詞と関係をになう上で問題になるが、ILでは言語活動を行っている『発話状況』のレベルで先行詞を考えなければならない。ILの先行詞の条件は、はからずもCENの先行詞の条件と同じであるが、これは偶然ではない。CENの場合、Nという名詞の使用によって、概念化された名詞句を取り上げなければならず、『言語的コントロール』の支配下にあること、CEのdéictiqueな性格により、『発話状況』の現場で先行詞と関係づけることを要求されること、の二つの要件によって、結果的にILと先行詞がもつ関係と極めて類似した関係をCENと先行詞が持つことになったのである。ただし、ILと先行詞との関係は、ラングに内在した機能として自動的に働くのに対して、CENと先行詞の関係は主体の積極的な働きかけによって、半ば語用論的に結びつけられたものであり、この点でこの二つの関係はかなり性格を異にしている。

CENとCEの共通点は、その現場に密着した語用論的な性格に見出せるが、それを論ずる前にまず相違点を確認しておきたい。これまで見てきたように、CEは『十全な名詞句』として表現されえない対象を語用論的に名詞化したもの、としてある。つまり指示の内容そのものが語用論的に決定されるのであるが、CENの場合は、名詞Nの使用によって、すでに概念化の完了した対象を指示するため、指示内容は言語的に決定され、語用論的性格は指示の仕方においてしか現れない。要するに、指示される内容にまで語用論的性格が見出せるか否かの違いである。

そこで共通点であるが、これは指示の仕方の語用論的性格にあり、発話行為の主体が自分が置かれている立場から積極的に対象を指定する働き、となって現れる。ただ、このdéictiqueな性格はCEの中でも特に、強勢のおかれた位置に現れうるçaにおいては顕著であるが、êtreの主語という限定された位置にしか生じないceの場合にはそれほど強くは感じられない。そこでçaに限って、指示の仕方の語用論的性格をILとの対比の上で、次のように規定してみる。

(仮説3)ILは『発話内世界』内部の観点に立って、そこに含まれるスペースの中に『十全な名詞句』として存在している要素を指示するが、çaは『発話状況』の立場から、『発話状況』に重なる「親スペース」の中に、そのスペースの中では『不完全な名詞句』としてある要素を指示する。

この規定によって、ILとCEの対立がLENとCENの対立との並行関係のもとに、我々の理論の枠組みの中で、統一的に理解されることになる。具体的な例を見てみよ

う。

(36) (a) Saint Nicolas, ça n'existe pas ! (= un seul point de vue, celui du locuteur qui n'assure pas de référence catégorique, indépendant de ce qu'il dit)

(b) Saint Nicolas, il n'existe pas ! (= il renvoie nécessairement au point de vue de l'interlocuteur, qui lui assure — fictivement pour le locuteur — sa catégorimaticité) (Cadiot, 1988)

ここで Cadiot がこの (a)(b) の違いについて付したコメントに注目してほしい。我々の言葉に翻訳しよう。(36a) は、『発話内世界』が『発話状況』に重なる。「話者の観念の世界」であるそのスペースの中では、Saint Nicolas は『値』の存在しない『不完全な名詞句』である。それを話者の立場、すなわち『発話状況』の立場から指示しているのである。これに対し (36b) では、『発話内世界』が「話者の観念の世界」を親スペースとして、その内部に「聞き手の観念の世界」という子スペースが形成されたその全体としてある。IL はこの子スペースの中の要素、即ち『値』が存在し、『十全な名詞句』としてある Saint Nicolas を指示することになる。

(26) の例も再度観察してみよう。

(26) Ça coûte combien une auto comme ça ?

comme ça の ça が『発話状況』の立場からの直示指示であることは言うまでもない。最初の une auto comme ça に相当する ça も、この『発話状況』に重なる「親スペース」の中にあるからこそ『不完全な名詞句』なのであって、(21)(22)(32) のように、別なスペースを想定すれば『十全な名詞句』としても機能しうるであろう。つまりこの ça も『発話状況』の立場から指示を行っているのである。

6. 総称

un N, le N, les N の三つの形態によって与えられ、一般に『総称』と呼びならわされている範疇があるが、これら三つの形態に共通する意味的特徴をあげ、厳密な意味で『総称名詞 (句)』を定義することは必ずしも容易ではない。ここでは、Garmiche (1983) および Kleiber et Lazzaro (1987) らの方向にそって、概ね①クラスに属する特定の成員 (個物 =individu) を指示しない、②クラス (種) に対して、あるいはクラスの成員全体に対して適応される記述のなかで使われている、という二つの特徴を備えたものをそう呼ぶことにする。

この第一の特徴からくる必然として、特定の成員 (『値』として機能する) を指示する名詞句と同列におかれた時、総称名詞句は『値』を欠いた『役割』のみの『不完全な名詞句』としての価値しか持たない、ということがある。(6) の (a)(b) の答えの部分が構築する『発話内世界』を考えてみよう。

(37) J'aime { (a) cette musique. (特定) / (b) la musique. (総称)

(37)は(a)(b)ともに同一の『発話内世界』の中にあると考えてよい。つまり、同一の環境のもとで特定名詞句と総称名詞句が共起するのである。この環境(= スペース)の中では、総称名詞句は『不完全な名詞句』として機能するのでその代名詞化は ça による他はなく、(6) のような結果がでることになる。

だが、第二の特徴の観点から総称名詞句を見る時(これは、それが生じる環境を中心としてその中で総称名詞句をとらえるということだが)、総称名詞句は「種」そのもの、あるいはプロトタイプとしてある一成員を『値』とする『十全な名詞句』として機能することになる。われわれの発話場の理論をここにあてはめるなら、「『発話内世界』が総称スペースである、という解釈が先行するとき、そのスペース内に要素を持つ総称名詞句は、『値』を備えた『十全な名詞句』として機能する」と、定式化できる。具体例をあげよう。

(38) Un chien parvient à retomber de 6 m sur ses pattes. Au-delà, il se brise un membre ou l'os du palais, et peut souffrir de lésions dans la rate. Plus il est lourd, plus il risque de se blesser ou de se tuer. (*Quid*, in Furukawa, 1989)

この場合、第一文の『発話内世界』が「総称スペース」という解釈をうけた後で、第二文以下が続く。この時第二文以下の最も自然な『発話内世界』解釈は、第一文を受けて「総称スペース」の中に置かれると言うものであろう。つまり、「総称スペース」解釈が先行し、そのスペースの中で un chien は「プロトタイプの一成員」という『値』をもつ。il はそういった『値』をもつ『十全な名詞句』としての un chien に変わるものなのである。(18a) も同様である。ここでは、最初の un cheval est un mammifère. が総称スペース解釈を強要するから、それに続く et 以下の記述はそのスペースの中で働くことになるのである。総称の un N が『十全な名詞句』として機能するプロセスは、(32) に見られるような不定語の場合と酷似している。

(39) Un homme est un homme, si mal appris et mal embouché qu'il soit. (George Sand, *Les maîtres sonneurs.*)

この例など総称名詞句とも不定語句とも両用に解釈しうるものであろう。

このような観点に立つと、ILによる総称名詞句受け直しの条件は「当該の『発話内世界』が「総称スペース」であるという解釈が確立していること」ということになる。また逆に、そういった解釈が確立していない場合、総称名詞は ça で受け直される。事実、(4b) のように主語が左方転移された構文で、主語が総称名詞句の場合しばしば ça が現れるが、その発話が生じる状況を観察すると、左方転移されない構文を用いたのでは眼前描写文か総称文か区別がつかないことが多い。

(40) Un zizi, ça sert à faire pipi debout. (Maillard,1987)

これは Maillard の三才半になる娘が自分の兄の行為を目撃して発した発話を、Maillard

が書き留めておいたものである。この『発話状況』のもとでは左方転移されない文 Un zizi sert à faire pipi debout. は、目の前にある兄の特定の zizi を指してそれを『発話内世界』に導入したものと解釈されかねない。Un zizi を左方転移し、それを ça で受ける事によって、『発話状況』の立場から(そしてあくまでもその立場においてのみ)『値』を欠いた『不完全な名詞句』であることを示し、特定解釈を拒否するという消極的な手段によって総称性が示されているのである。les N の場合も同様である。

(41) Les filles, ça a du courage. (*ibid.*)

これも一小学校の女性教師が発した発話を Maillard が書き留めたものだが、左方転移しない構文を用いた場合、les filles が「自分の受け持つ女生徒」を指すものととられかねず、その解釈を退け一般化したかったために ça を用いたものであろう。ça 本来の語性の中に総称を示す性質はない。(40)(41)の場合も(17a)(33)(34) の ils と同様、ça がその『発話内世界』解釈を「総称スペース」とするために働いているのである。しかし、元来「総称スペース」とは『発話状況』と遊離した所に設定されるべきものであり、その『発話内世界』の解釈が自然に行われるなら、その内部の要素に対する『発話状況』からの不必要な指示の介入は、かえって談話の自然な流れを阻害することになる。このため、他の要因により『発話内世界』の解釈を「総称スペース」とするのが自然な発話では、ça による左方転移構文の容認度は低く、むしろ IL が普通になる。

(42) un chien quand on l'attaque il se défend. (Culioli, in Furukawa, 1988 et 1989)

これは、(32)の場合と似ている。(42)の文で un chien se défend. のみでは眼前描写文か総称文か区別がつかない。従って un chien, ça se défend. の総称文を得るが、quand on.. の節の付加により、眼前描写文解釈を消し、一定の条件下における総称スペース解釈を得るので IL のみが可となり、ça が用いられなくなるのである。

(43) Un chat, ça miaule. Un mouton, ça bêle. Quant à un chien, ça/il aboie. (Furukawa, 1988)

ここでは il と ça の双方が可だが、quant à というのが極めて『発話状況』に密着した表現であることに注目してほしい。quant à の後では、前文までと同様、『発話状況』の立場からも、quant à が構築する「総称スペース」の立場からも指示が可能なのである。

以上の考察により、総称名詞句指示の IL/CE の問題も(仮説 2)(仮説 3)で説明可能なことがわかるであろう。

7. 結論

(仮説 2)(仮説 3)が本稿の結論である。これまで見てきたように、『発話状況』『発話内世界』メンタル・スペースといった概念は、名詞句の指示を考える上で極めて有力な視点となりうるように思う。Kuno (1972) による日本語の代名詞「自分」の研究、Ruwet (1990) による代名詞 en の研究等でも、誰の意識のなかに指示対象が現れるか、という

問題が論じられており、本稿の枠組みが適応できる可能性を感じさせてくれる。これからの課題としたい。

〔註〕

(1) 本稿において大文字で IL と書く時、三人称の人称代名詞のすべてを代表するものとして用い、大文字で CE と書く時、être の主語として用いられる ce、その強勢形である ça、文語形である cela のすべてを代表するものとして用いる。このように ce, ça, cela を同一語の変異体とみなすことの是非は改めて問わねばならないが (Cadiot (1988) 参照)、本稿は IL を扱うことが主眼であるので、とりあえずこのように処理しておく。尚『指示対象』(référent) とは「言語記号が、一つの経験によって切り取られた形で言語外現実の中に指すもの」(『ラルース言語学用語辞典』) を言う。ただし、あとで問題になる (9) Ursula veut épouser un millionnaire. と言う発話で、特定の百万長者が存在せず un millionnaire を範疇指示と読む時、そうして指示される範疇まで指示対象に含めるか否かについては、学者によって態度が一定していない。本稿ではそれらも含めて広義で用いることにするが、狭義の『指示対象』は後に定義する『値』と同じものである。

(2) * 印は、その文が非文法的か、当該の文脈では不適切な文であることを示す。(1) の (a)(b) が単独で示す文意の違いについては Tamba-Mecz (1982) 参照。尚、彼女によれば、Il est un linguiste. の形は必ずしも非文ではなく、特定の文脈では可能になる。

(3) Frege の理論については飯田 (1987) によった。

(4) これらがすべて厳密な意味で同じということではない。Milner の『潜在的指示対象』は、文脈とは無関係に単語が持つ辞書的意味であるが、Fauconnier の『役割』とは、一定の文脈に置かれた時に特定の対象を限定しうる、名詞句の意味特性を言う。最も簡明な形で例示すれば、président の記述的意味が『潜在的指示対象』であり、le président の記述的意味が『役割』である。尚、本稿における『役割』と『値』の厳密な定義は後に行う。

(5) Fauconnier (1988) 参照。

(6) Kripke (1980) 参照。

(7) とりあえずこのように処理しておく。厳密に言えば、マリーが Georges を誤ってポールである、と思っているような場合、発話の中にこの名を用いる話者、の現実において Georges が持つ『値』と、マリーの観念の世界のなかで Georges が持つ『値』とが異なる、ということもありうる。ただし、特に文脈が指定しない限り、固有名は恒等関数と処理して問題ない。

(8) 日本語の場合、固有名は『値』指示にのみ用いられるようである。チョムス

キーがどのような人物か知らない場合、通常「チョムスキーは誰ですか」とは言わず、「チョムスキーというのは誰ですか」あるいは「チョムスキーって誰ですか」というように、「~という」や「~って」という形が固有名とともに用いられるのが普通である。東郷(1986)参照。

(9) 煩雑さを避けるため『役割』の語を用いたが、厳密にいえば、en が受け継ぐのは『役割』ではなく『潜在的指示対象』である。註(4) 参照。

(10) この定義は筆者のものである。Fauconnier 自身は明示的な形で定義を述べてはいない。

(11) Fauconnier (1984) p.32. 引用は邦訳によった。英語で incrementable set となっている部分は、フランス語版では ensembles modifiables(変質可能な集合) と表現されている。

(12) Fauconnier (1984) の用語では (a) はトリガー (déclencheur)、(b) はターゲット (cible) と呼ばれている。

(13) 「言語活動の『語用論的』側面とは、その利用の諸特性(話し手の心理的動機づけ、対話者の反応、談話の社会化された類型、談話の対象、など)にかかわる面で、統辞論的側面(言語構成の形式的特性)および意味論的側面(言語実体と世界との関係)と対立する」(『ラルース言語学用語辞典』)。以下本稿では、すべてこの意味で『語用論的』(pragmatique) という言葉を用いる。

(14) 『発話状況』の観点から『十全な名詞句』というとき、その名詞句の『役割』が実際に置かれたスペースの中で自動的に『値』を持つのではなく、その『役割』が自動的に『値』を持つことになるスペースが想定されればよい。

(15) これ以外に『値』として想定される固有名を『役割』に読む、という読みを Fauconnier (1984) は提示しているが、原理的にはここで述べる二つの読みを検討すればよい。

(16) le livre という言語的役割がかぶせられることは重要である。ILの受け直しにあっては、現象的に言語的先行詞が存在しない場合でも、常に発話者の意識の中には言語的に実現しうる先行詞が存在している。例えば、ジョンが une table を車のトランクの中に入れようとしている場面で、マリーがジョンに向かって、Tu n'arriveras jamais à la faire entrer dans la voiture. (Tasmowsky - De Ryck et Verluyten, 1982) と言うことはできるが、入れようとしているものが une table ではなく un bureau の場合、la を le にしなければならない。この例など、話者の意識の中に言語的先行詞が存在することを示す証拠となる。

(17) 『言語的コントロール』『語用論的コントロール』という議論については Tasmowsky - De Ryck et Verluyten (1982), Kleiber (1990) 参照。

(18) ここは elle で受けることができない、ということに意味がある。une auto comme ça を現前に存在している cette auto に代えても ça coûte... とすることはで

きるが、その場合は elle で受け直すことも可能なのである。

(19) Tasmowsky-De Ryck et Verluyten (1982) 参照。

(20) 詳しくは Nunberg (1978) 参照。

(21) 指示対象の決定にあたって、発話が産出される状況に照らさなくとも、言語的に構成される文脈の中で、他の要素と結ぶ統辞論的あるいは意味論的関係によって決定可能な指示の仕方を anaphorique、発話が産出される状況に照らさなければ決定できない指示の仕方を déictique と一般に形容する。

〔参考文献〕

朝倉季雄 (1981):『フランス文法ノート』, 白水社.

Burston, J. L. et Burston, M. M. (1981): "The Use of demonstrative and personal pronouns as anaphoric subjects of the verbe être", *Linguisticae Investigationes* 5, pp. 231-257.

Cadiot, P. (1988): "De quoi *ça* parle ? A propos de la référence de *ça*, pronom sujet", *le Français moderne*, 56, pp.174-192.

Coppieters, R. (1974): "The opposition between IL and CE and the place of the adjectives in French", *Harvard Studies in Syntax and Semantics I*, pp. 221-280.

Dubois, J. et al. (1973): *Dictionnaire de linguistique*, Paris, Librairie Larousse. 伊藤晃他訳『ラルース言語学用語辞典』, 大修館, 1980.

Donnellan, K. (1966): Reference and definite descriptions, *Philosophical Review*, 75, 281-304.

Fauconnier, G. (1984): *Espaces mentaux*, Paris, Editions de Minuit. 坂原茂他訳『メンタル・スペース』, 白水社, 1987.

—— (1988): "Roles, valeurs and copula constructions", Meaning and Interpretations, *Versus*.

Furukawa, N. (1988): "Le SN générique : référentiel ou non référentiel ?" 日本フランス語学研究会第88回例会 口頭研究ハンドアウト.

—— (1989): "Le SN générique et les pronoms ça/il(s)— sur le statut référentiel des SN génériques— ", *Modèles linguistiques*, XI, pp. 37-57.

Galmiche, M. (1985): "Phrases, syntagmes et articles génériques", *Langage*, 79, pp.2-39.

飯田隆 (1987):『言語哲学大全 I 論理と言語』, 勁草書房.

井元秀剛 (1989):「le N と ce N による忠実照応」,『フランス語学研究』23号, PP.25-39.

Kleiber, G. et Lazzaro, H. (1987): "Qu'est-ce qu'un syntagme nominal générique ? ou les carottes qui poussent ici sont plus grosses que les autres", *Rencontres avec la généricité*, Klincksieck, pp. 73-111.

Kleiber, G. (1986): "Pour une explication du paradoxe de la reprise immédiate", *Langue française*, 75, pp. 54-79.

—— (1990): "Quand IL n'a pas d'antécédent", *Langage*, 97, pp.24-50.

Kripke, S. (1980): *Naming and necessity,* Oxford, Blackwell. 八木沢敬, 野家啓一訳『名指しと必然性』, 産業図書, 1985.

Kuno, S. (1972): "Pronominalization, Reflexivization, and Direct Discourse", *Linguistic Inquiry*, 3:2, pp.161-195.

Maillard, M. (1987); "Un zizi, ça sert à faire pipi debout", *Rencontres avec la généricité,* Klincksieck, pp. 133-206.

Milner, J.-Cl. (1982): *Ordre et raison de langue*, Paris, Seuil.

三藤博 (1989):「フランス語における c'est / il est, ce N / le N の対比について(情報の帰属領域の理論に向けて)」,『フランス語学研究』23号

Nunberg, G. (1978): *The pragmatics of reference*, Bloomington, Indiana University Linguistics Club.

Ruwet, N. (1990): "En et Y: Deux clitiques pronominaux antilogophoriques", *Langage*, 97, pp.51-81.

Tasmowski-De Ryck, L. et Verluyten, S. P. (1982): "Linguistic control of pronouns", *Journal of Semantics*, 1, pp.323-346.

Tamba-Mecz, I. (1983): "Pourquoi dit-on : *Ton neveu, il est orgueilleux,* et *Ton neveu, c'est un orgueilleux ?", Information grammaticale,* XIX, pp. 3-10.

東郷雄二 (1986):「"Mon frère, il est linguiste et le coupable, c'est lui." 代名詞 IL と CE の用法について」,『フランス語フランス文学研究』53号, pp. 102-111.